

朝廷「権威」と在地社会

山城国の陵墓を事例に

上田 長 生

はじめに

近世天皇・朝廷をめぐる研究は、近年めざましい進展をみせている。周知のように、七〇年代半ば以降幕藩制国家論の中で朝幕関係論として本格的に取り組まれ始め、維新时期国家論の前提として⁽¹⁾、その重要性が喚起された。九〇年代になると高埜利彦氏⁽³⁾が提示した枠組みを踏まえて、朝幕関係の展開や朝廷内機構・制度について豊かな知見が共有されることになった。また、藤田覚氏⁽⁴⁾の研究によって、寛政期以降、天皇・朝廷（「権威」）が自立化・浮上し、近代天皇制の一前提になったことも明らかにされている。ところが、実証研究の蓄積の一方で、近世天皇・朝廷をめぐる視座について、井上勝生氏は、近世、とりわけ後期の天皇・朝廷の主體的営為を描くことで天皇・朝廷像が肥大化する問題を指摘

している。⁽⁵⁾そうした問題が最も端的に表れ、また実証研究もさほど多くないのが、天皇・朝廷と社会・一般民衆との関係をめぐる問題ではないだろうか。たしかに、近世後期の天皇・朝廷が自立に向かい、「権威」が浮上したことは否定できない。しかし、そうした動きが社会全体の中で相対的にどれほどの位置を占めるのか、具体的な実証の蓄積の上に議論する必要があるだろう。そのためには、天皇・朝廷の「権威」と向き合い、受容した側、つまり在地社会の受容の背景・契機を明らかにすることが不可欠であろう。近年、神社・神職や宗教者をめぐる研究の蓄積⁽⁶⁾によって、こうした問題を考える素材が蓄積されつつある。そこでは、本所による統制を明らかにした従来の研究と異なり、「権威」を受給者の側から相対化する視点も出されている。しかし、天皇・朝廷「権威」の浮上という大枠の理解の見直しには至っていないのではなから

うか。これに対して、本稿では、幕末維新期の天皇陵をめぐる動向からそうした問題を考える素材を提示したい。幕末期の修陵が、朝廷の強い介入を受けつつ進められ、勅使参向や祭祀が繰り返されたことを考えるならば、陵墓をめぐる動向から在地社会と朝廷の関わりを分析することができないのではないだろうか。

ところで、これまでの陵墓研究では、史料が多く残存し、外形的变化も捉えやすい河内・和泉・大和の巨大古墳に関心が集中し、天皇・朝廷が最も身近にある山城、京都周辺の陵墓と周辺民衆の関係はほとんど検討されてこなかった。⁽⁷⁾しかし、巨大古墳のような用水・草木利用等での直接的なつながりがない、山城の小規模な陵墓を取り上げること、むしろ周辺民衆の意識や関わりをより明確に捉えることができるのではなからうか。また、筆者がこれまで分析してきた河内・大和での事例・展開を相対化し、幕末維新期の陵墓をめぐる動向の全体像を考える素材・視点になると考えられる。

以上のような整理を踏まえて、本稿においては、伏見に隣接した紀伊郡堀内村（現京都市伏見区）の崇光天皇陵をめぐる動向を検討する。その際、河内・和泉・大和の事例との違いに留意すること、国毎の地域差を含めた当該期の陵墓をめぐる在地社会の動向の全体像を考察したい。最後に、こうした分析を踏まえて、当該期における朝廷「権威」と在地社会の関係に言及したい。

第一章 山城における修陵・管理の特質

これまでの筆者の研究で明らかにしたように、大和・河内・和泉では中間層・村役人層が長・守戸として陵墓管理を担った。これに対して、山城では、長・守戸の人的構成において全く異なる特徴が見いだせる。まず、具体的な史料を掲げる。

○八日己亥晴
慶応元年十二月

一戸田大和守殿家来永田市郎左衛門・〇原彦輔〇手紙来、如左以手紙致啓上候、然者御陵之儀二付、其御領分別紙名前之者江兼而守戸之心得二而 御陵相守候様頼置、右名前 天朝江差出置候処、今般被下物有之相渡申候間、来ル十二日四ツ時印形持参二而当役所江御差出可被申候様致度奉存候、就而者守戸之仮達致度候間、此段御断申上候、若御差支も御座候ハ、早々御報可被下候様致度大和守申聞候、依之此段可得御意如斯御座候、以上

十二月八日

猶以病氣等二而差合茂候ハ、代人御差出被下候、以上

別紙 覚

後一条帝御陵
後一条帝御火所

吉田村 市兵衛

吉田様御家来

田口帯刀殿

右之通

十二月八日

吉田様御内

御雑掌中様

右相応之返書遣ス、小谷木工〇返書也⁽¹⁰⁾

右の史料は、慶応元年（一八六五）一二月、吉田山東麓に所在した後一条院の山陵と火葬所の長・守戸に仮に任命された、吉田家来田口帯刀と吉田村の吉田家領民の市兵衛・喜兵衛ら五名が山陵奉行役所に呼び出された際の呼出状である。ここから、後一条陵の守戸として、公家である吉田家の家来と同家領であった吉田村の人々が任命されたことが分かる。後一条陵が吉田社に近接したため、同家家来と領民による管理が願われたと推測される。こうした人的構成は後一条陵に限られない。表1は、山城の長・守戸を一覧にしたものである。これによると、例えば、天智陵の長を広橋家来築山右膳、六条・高倉陵の長を野宮家来堀田典

喜兵衛

吉左衛門

次郎吉

謙次郎

戸田大和守内

永田市郎右衛門

杉原彦輔

表1 山城国長・守戸一覧

陵 墓	所在地	長・守戸名居
天智	宇治郡山科郷山陵村(日ノ岡峠)	(長) 広橋内築山右膳、(守戸) 高谷平次・磯田甚右衛門・高谷安之丞・木下五右衛門・江村甚四郎・磯田忠右衛門
桓武		(長) 柳原内真継安千代
醍醐	宇治郡醍醐村	(長) 柳原内山田右衛門、(守戸) 三宝院門跡内高安宗助・理性院家来高安新右衛門・普賢院家来石村五郎兵衛・理性院家来吉田内匠・五智院家来下村良助
朱雀	宇治郡醍醐村	(長) 三宝院門跡内藪典膳、(守戸) 普賢院家来石村庄兵衛・行揃院家来内海五郎兵衛・西性院家来足立福万・西性院家来高田源右衛門・山田式部家来藤井重右衛門
仁明	紀伊郡深草村	(長) 御草山守り長谷川太兵衛、(守戸) 市右衛門・甚兵衛・卯之助・良助・善福寺家来大澤瀧次郎
淳和火葬所	乙訓郡物集女村	(長) 東本願寺内橋本益五郎、(守戸) 武右衛門・八郎兵衛・九郎兵衛・嘉兵衛
文徳 花山陵・一条火葬所	中野村 葛野郡大北山村	(長) 野宮内山本掃部、(守戸) 喜兵衛・藤右衛門・伊右衛門・伊三郎・藤兵衛
		(花山陵長) 大原内松井金次郎、(一条火葬所長) 禁裏内古谷伝三郎、(守戸) 文五郎・浅七・善次郎・六右衛門・武兵衛
白川・堀河火葬所	葛野郡小北山・等持院村	白川火葬所長) 仁和寺内本多帯刀、(堀河火葬所長) 小堀数馬手代坂根英之丞、(守戸) 喜兵衛・音次郎・市右衛門・藤右衛門
宇多	葛野郡御室後口山字うきの	(長) 仁和寺内上田頼母、(守戸) 久七・茂右衛門・嘉兵衛・源七・熊蔵
後冷泉・近衛火葬所 陽成	蓮台野 愛宕郡岡崎村真如堂前	(取締) 蓮台寺、(長) 大橋数馬、(守戸) 権兵衛・新六・九兵衛 (長) 真如堂役武田斎宮、(守戸) 半七・栄蔵・市兵衛・惣兵衛・久右衛門
六条・高倉分骨所	葛野郡宇多野中山 清閑寺	(長) 野宮殿内堀田典膳、(守戸) 与兵衛・九兵衛・太兵衛・幸助・安兵衛
後二条	愛宕郡白川村	(長) 聖護院宮内藤木日向守、(守戸) 五兵衛・清右衛門・彦兵衛・林右衛門・五郎右衛門
花園	栗田宮内	(長) 青蓮院宮内秋田帶刀、(守戸) 笹田安兵衛・滝井平次・山本伊助・岡田吉兵衛・福山善次
嵯峨	葛野郡嵯峨村御廟山	(長) 大覚寺内細川和泉守・小畑市郎右衛門、(守戸) 小畑善右衛門・尾崎惣助・渡邊五郎兵衛・小畑源兵衛
後宇多	葛野郡嵯峨蓮華峯寺八角堂	(長) 大覚寺内衣笠備前守、(守戸) 小畑市郎右衛門・小畑喜右衛門・尾崎喜左衛門・池田市左衛門・江村忠兵衛
後白河	大仏実報院	(長) 大興徳院、(長格) 石川健之助、(守戸) 甚吉・弥十郎・佐吉・理三郎
龜山(分骨堂)	南禅寺地中	(取締) 南禅寺、(長) 南禅寺家来伊東樹一郎・大沢芳太郎、(守戸) 西田甚右衛門・志賀谷利右衛門・近藤忠兵衛
後堀河・四条・後水尾・ 後光明、他 15 陵	泉涌寺塔頭来迎院	(取締) 泉涌寺、(長) 来迎院・雲龍院、(守戸) 山田主税・山本左近・安田源三郎・藤井縫殿・安藤將監・佐藤新三郎・伊藤伊助・藤井庄兵衛・岡部数馬・和田末四郎・林源吾・岩室武市
後光厳・後円融・後小 松火葬所 鳥羽・近衛	泉涌寺塔頭雲龍院 竹田安楽寿院	(取締) 安楽寿院、(鳥羽陵長) 長谷川織部、(近衛陵長) 長谷川佐一郎、(守戸) 七右衛門・太右衛門・太兵衛・九兵衛・彦右衛門
後深草・伏見・後伏見・ 後円融、他 8 陵	深草法華堂	(取締) 安楽行院、(長) 雨森善四郎、(守戸) 安楽行院家来石田数馬・山田源三郎・清水久次郎・鳥居勘右衛門

出典：「山城国丹波国御陵長守戸名前取調」(宮内庁書陵部図書課所蔵)

※「陵墓」覧の(火)は火葬所、(分)は分骨所を示す。

※ 本一覧では紙幅の都合などから、主要なものを挙げ、山城・丹波の全ての陵墓は掲げていない。また、この史料が作成されて以降変更されたとみられる人物もいるが、最終的に任命された長・守戸全員の名前が分かる史料は、現在のところ見あたらない。

膳、醍醐陵の長を柳原家来山田右衛門が務め、嵯峨陵の長は大覺寺内の細川和泉守、後冷泉・近衛火葬所の長を仁和寺内の本多帯刀が務めるなど、当該陵墓所在の寺院が取締、公家・門跡の家来が長、百姓・町人が平の守戸を務めていることが分かる。このように、山城では、多くの山陵が後一条陵と同じ傾向にあるといえる。

では、山城に特徴的なこうした傾向はどのような背景から生まれたのだろうか。表1では、長を務めた人物は柳原光愛・広橋胤保・野宮定功・大原重徳等の家来とされていた。彼等公家側の史料からその理由が明らかになる。幕末期の山陵に関わる公家の動向を記した『山陵御修補関係書類』⁽¹⁾には、「廣橋胤保山陵御修補御用掛履歴摘要」から「同年十二月四日 今般山陵御修補成功ニ付、御褒賞之件如何様可被 仰付哉、関白殿ヲ經テ御内意アリ、依之家侍取立被 仰付候ハ、畏入候旨上ク」⁽²⁾、同年同月十一日 胤保山陵御用掛之辺ヲ以テ家来二人陵長被命」、「野宮定功山陵御修補御用掛履歴摘要」から「同年十二月十四日 山陵御用掛之辺ヲ以テ家来二人陵長被命」、「柳原光愛山陵御修補御用掛履歴摘要」から「同年十二月十四日 山陵御用掛之辺ヲ以テ家来二人陵長被命」とそれぞれ引用されている。これによって、朝廷内に設けられた山陵御修補御用掛の広橋・野宮・柳原に対して、関白を通じて孝明天皇より山陵御修補成功の褒賞の望みが尋ねられ、家来が二人ずつ長に取り立てられたことが分かる。さらに同史料には「野

宮定功公武御用記」慶応元年二月一四日条、

一諸山陵取締並長・守戸等奉行戸田大和守武辺打合之上、一昨日ヨリ追々大和守邸江呼出申渡有之、御用掛廣橋家来二人・柳原家来二人・予家来二人可被 仰付旨ニ付、先達テ家僕山本掃部正修・堀内典膳源成兼等名注遣置、一昨日成義、今日正修等召寄有申渡、且以来年々給米可有之、当年無給米之間聊以 思食銀子賜之、以十五万殘米取許、去三十日大和守江相渡、一昨日ヨリ召出申渡之、次夫々賜之が引用されており、これを裏付けている。表2は、山城・丹波の長・守戸を書き上げた『御陵長守戸被下銀渡帳』⁽³⁾の各長の部分にある書き込みを摘記したものである。表1・2とも不完全な部分や変更されるところもあるため、若干の齟齬もみられるが、公家や考証方谷森善臣の望みによって、柳原光愛家来が天智陵・醍醐陵、広橋胤保家来が桓武陵・陽成陵の長といった形で割り振られていることが分かる。こうした望みについては、次の慶応元年か二年のものとみられる、大原重徳から戸田忠至への書状が興味深い。

向寒之砌愈御安康珍重存候、陳者家来松井金次郎事、花山帝山陵長ニ御取極之事、段々御手数相掛何共氣毒千万ニ存候、右之儀も昨日御伝聲有之、慥ニ承知いたし辱存候、拟本人も殊外難有かり申居候、尤右ハ愈御治定ニて被 仰付候と申ニてハ無之候へとも、かく迄御取持被下候ハ、よもや相変候事

も御座有間敷、本人も深々難有かり候二付てハ、御礼且ハ人物も御覧の爲ニ誰か差添出頭為致度存候へとも、差向人柄も無御座候二付、此文ヲ持本人差出し候間、人物御覧可被下尤御用繁なれハ
夫ニも不及候何歟なしニ御出入為致候、何歟龜莫ヲ差上候様と申居候、御笑納可被下候、早々要用耳不典

十月廿八日当賀

重徳

戸田大和守殿⁽¹³⁾

これによると、大原家の家来松井金次郎は、大北山にあった花山陵の長に決まり、この期に及んでは変更もないだろうと大変喜んでおり、この手紙を持たせてお礼に向かわせるので、松井の人物もみてほしいとしている。ここからは、まず、長に任命されることを大原重徳と家来の松井が大変喜んでおり、「かく迄御取持被下候ハ、よもや相変候事も御座有間敷」と心配していたことが分かる。さらに、お礼と合わせて「人物御覧可被下」としていることから、戸田をはじめ山陵奉行所では松井をほとんど知らないか、あるいは少なくとも松井の人物・人柄をみた上で長に選任したわけではなかったことがうかがわれる。公家家来が務めた長の人選については、褒賞を受けた公家に完全に任され、右の史料でも人柄の確認を求めているもの、おそらく推薦通りに任命が行われたものと考えられる。

この他、表1からは、龍安寺・大覚寺・仁和寺等の当該陵墓と関係の深い門跡や寺院が長・守戸を務めるパターンも多いことが

分かる。近世天皇家の菩提寺であつた泉涌寺でも、泉涌寺が取締、塔頭来迎院・雲龍院が長を務め、泉涌寺家来の山田主税・山本左近・安藤将監・藤井縫殿等一二名が守戸を務めている。泉涌寺では、近世のあり方がそのまま幕末の陵墓管理制度に当てはめられた形といえよう。

次に、それ以外の守戸がどのように選任されるのかを考えよう。

左の「覚」は、元治元年（一八六四）十一月に、次章で検討する紀伊郡堀内村の庄屋吉村勘兵衛が、村内の崇光陵の守戸役にふさわしい人物を見立てたものである。

覚

平兵衛

五十五才

三右衛門

五十七才

半丁

治兵衛

四十才

同市左衛門

式十七才

樽九

式十九才

表2 公家等よりの長任命希望一覧

天智	柳原様 ^ろ 御申込之内
醍醐	柳原様 ^ろ 御申込之内
桓武	広橋様 ^ろ 御申込之内
仁明	非蔵人并二条様御内高嶋右衛門 ^ろ 申込之内
白川分骨所	二条様御用人高嶋右衛門 ^ろ 申込
淳和火葬所	谷森大和介 ^ろ 申込之内
文徳	野宮様 ^ろ 御申込之内
花山・一条火葬所	福井栄太郎 ^ろ 申込
白川・堀河火葬所	高津儀一郎・仁科庄右衛門 ^ろ 申込
後冷泉・近衛火葬所	谷森ヨリ申込
陽成	広橋様 ^ろ 御申込之内
六条・高倉分骨所	大原様 ^ろ 御申込

出典：史談会採集史料「御陵銀渡帳」

右之通守戸役見立、子十一月二差出ス⁽¹⁴⁾

この中からは後に平兵衛・市兵衛・久兵衛が守戸に任命されており、『崇光天皇陵御取建一件諸記』という記録から山陵奉行所役人に依頼されて推薦したものであることが分かる。また吉村は、桓武陵の守戸の推薦も依頼され、伏見奉行に届け出たところ「取調見候様」沙汰されたため、推薦を行っている⁽¹⁵⁾。山城では、地域の事情に通じた吉村のような人物に推薦させることで守戸が選任されたのである。

では、これを長・守戸選任の地域差として考えてみよう。大和・河内等と比較することで、双方の特質がより明確になるだろう。これまで筆者が検討してきた大和・河内の場合、巨大古墳の大規模な普請のために山陵奉行所役人が出張し、大和では今井・八木・

市兵衛

五十五才

久兵衛

三十五才

清七

五十五才

清三郎

四十九才

吉左衛門

六十才

御所等、河内では碓井村、和泉では堺の旭蓮社（大阿弥陀經寺）等に拠点を置いて駐留し、周辺諸陵の見分―普請指示―見廻りを繰り返すことで普請を進めていった。この過程で陵墓周辺村々の村役人達と交流し、接待を受ける中で現地事情を把握し、陵墓管理者も選任されていった。これに対して、中間層・村役人層が普請請負や守戸任命を願う積極的な動きが多くみられた。

一方、山城の場合、寺町通丸太町上ル東側の山陵奉行役所から役人がその都度出張して普請を指示した。陵墓の規模も小さく、普請も容易であるため、大和・河内・和泉ほど現地に滞在する必要がなく、現地で交流を持つことで事情を把握することができなかったと考えられる。従って、守戸の任命にあたっては、右にみた吉村勘兵衛の事例のように庄屋等に推薦させることで選任されていったのである。さらに、山城では、拙稿で検討した⁽¹⁷⁾ように、旧来から陵墓と関係のあった諸寺院や、天智陵との中世来の結びつきを由緒として主張する山科郷山陵村以外に、普請請負や守戸任命を求める動きはみられなかった。これは、請負を希望するほどの大規模な普請がなかったことや、普段から朝廷と近接しており、公家・寺院等への館入関係を獲得しやすかったため、修陵の機会をとらえて利益誘導を図ろうとするような志向が希薄であったためと考えられる。

以上のように、山城における陵墓管理は、陵墓所在寺院や公家・門跡家来が取締・長を務めるものだった。山城は朝廷が間近に存

在するため、公家や門跡などの公家社会の規定性が強かったといえる。公家の場合、山陵御修補御用掛を務めた柳原・広橋・野宮は、山陵修補の褒賞として家来がそれぞれ長に任命されていた。こうした公家家来が割り当てられた長と、陵墓周辺町村の役人層が務める守戸という、二つの異なった選任の背景を持つ人々によって長・守戸が構成されていたのである。

第二章 崇光天皇陵の管理と吉村家

（一）紀伊郡堀内村と庄屋吉村家

本章では、朝廷が近くに所在するという山城の地域的特質を踏まえつつ、崇光天皇陵という一つの陵墓に即して陵墓管理の様相を検討する。まず、崇光陵の所在した紀伊郡堀内村と、崇光陵を管理した堀内村庄屋吉村勘兵衛について確認していこう。

紀伊郡堀内村は、伏見廻り八カ村（堀内・向島・六地藏・三栖・毛利治部・景勝・大亀谷・深草、享保七年以降葭島新田も加わる）の一つで、伏見城跡を開発してつくられたことが「堀内」という村名の由来になった。領主支配では、近世を通じて伏見奉行預所⁽¹⁸⁾支配を受けた幕領の村である。村高は一、五〇三石八斗四升で、畑地が一、四〇〇石余を占め、食糧自給ができないため飢饉などの影響が大きい村だった。享保三年（一七一八）の家数は九二八軒で、内七六五軒が隣接する伏見町に居住していた。

近世を通じて堀内村の庄屋を務めた吉村家は、かつて伏見城代松平定勝の家臣で、山口駿河守の命で元和期に旧伏見城下を開発した草分四家の一つという由緒を持っていた。⁽¹⁹⁾吉村家は伏見江戸町に居住し、慶応三年（一八六七）段階で一七石一斗九升四合を所持し、若干の酒造業なども営んでいた。吉村家には、近世初期以降の堀内村の免定・皆済目録・土地台帳・宗門帳などの村政文書が大量に伝存している。⁽²⁰⁾

こうした吉村家と伏見奉行は、近世を通じて密接な関係にあった。奉行交代時には次のような「口上書」を提出して館入の関係を結んで下掃除を担い、運上も納めていた。ここでは、内藤豊後守正縄の着任に際して提出したものをあげる。

乍恐口上書

一伏見 御奉行様御屋敷御勝手向江前々々御代々私儀御館入被 仰付、五節句等御目見仕難有奉存候、尤百姓之儀故、御家中様方下掃除被 仰付候二付、御運上者御勝手江相納来り申候間、当御代茂先例之通被為 仰付被下候様奉願上候、以上

天保九年

戌十月

堀内村

伏見御支配

庄屋勘兵衛⁽²¹⁾

この他、毎年年頭・八朔・五節句に奉行に草花などを調達したり、奉行が度々吉村家の梅を観覧に訪れていることも確認できる。⁽²²⁾

また、禁門の変時には奉行の一家が吉村家に避難しており、親密さがうかがわれる。⁽²³⁾こうした密接な関係であったため、天明期の伏見騒動の際には奉行小堀政方との結託が問題になるが、最終的には「無御構」とされている。⁽²⁴⁾以上のような吉村家の概要を踏まえて、次に幕末期の崇光陵の管理をめぐる動向をみていこう。

（二）崇光天皇陵の修陵と長・守戸任命

文化十一年（一八一四）の堀内村明細帳には崇光陵などの陵墓の記載がなく、堀内村では陵墓が存在するとは認識されていなかったとみられる。⁽²⁵⁾この背景として、『京都御役所向大概覚書』に収載されている元禄一〇年（一六九七）九月の修陵の際記録に、

「江戸々之御書付」

一崇光

同国紀伊郡伏見二崩ス

「京都ニテ吟味」

陵所今知レ難シ、或ハ伏見大光明寺ナラン歟、然レトモ旧跡文明ナラス⁽²⁷⁾

とあるように所在が確かめられず、治定が行われなかったためと考えられる。そもそも伏見周辺の桓武陵や崇光陵は、伏見城の築城で破壊された可能性が高く、所在地を確定することは困難であった。これ以後も、幕府は所在地を把握していなかったと考えられ、崇光陵は幕府・在地社会双方において所在不明の状態だった。

たのである。

ところが、それまでの修陵以上の規模で探索・修復が行われた文久・元治期には、谷森善臣の考証・探索によつて、山陵は堀内村内の字泰長老に、火葬所は同じく字伊藤修理に治定されることになった。⁽³⁰⁾山陵奉行所役人の巡検・治定の経過を示す史料がないため、詳細は不明であるが、普請は元治元年（一八六四）九月から一二月まで行われたようである。⁽³¹⁾図1・2は『文久山陵図』の荒蕪図・成功図である。これを見ると、荒蕪図で竹藪の中に露出していた数個の石を中心に、竹林が切り開かれ、土壇を整えた上で垣が施され、拝所が設けられている。崇光陵もほぼ新造に近い形で普請が行われたのである。

普請完工後、一二月二八日には吉村勘兵衛が山陵奉行役所に呼び出される。左の史料は、翌年一月一〇日、山陵奉行役所から勘兵衛が「掃除役」を命じられたと伏見奉行所に届けたものである。

乍恐御届口上書

一去十二月廿八日、戸田越前守御出張所上寺町丸太町上ル所御敷ニ御出被成候御役人様御敷〆私義呼ニ参り候処、月過之折柄無抛村用モ有之、翌廿九日御用之次第承り、旁々名代之モノ差出候処、当村内字泰長老屋敷并伊藤修理屋敷ニ被為在候御陵并火葬所トモ掃除役之モノ相見立、追テ沙汰ニハ相成候得共、其迄之処右式ヶ所トモ私工御預リニ相成、日々見廻り大切ニ可致様被仰候、右ニ付為掃除料別紙之通被下

置、則使之モノ受取書差上金子受取帰り候得共、何分私右御用不案内ニモ御座候間、去ル五日上京仕、右御役人様へ委細相尋候処、右之通相違モ無御座候、尤掃除役ノモノ取極り候上ハ差図方モ有之候得共、当分之儀ニ付大切ニ取扱掃除等致候而可然、相変り候儀モ出来候ハ、早々可申出様被仰付候間、御受申上罷帰り申候、乍恐此段御届奉申上候、以上

丑正月十日

御奉行所様

堀内村庄屋勘兵衛

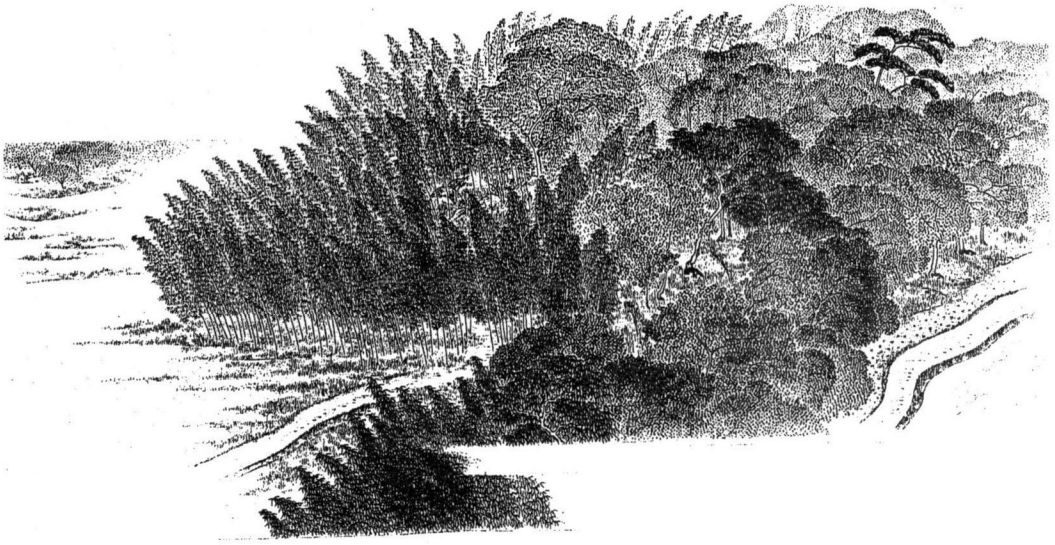
右之通相届候処、被仰付候通大切ニ取扱、入念掃除可致様被仰付候

戸田の見分に先立って、山陵奉行所役人神田辰之助から掃除等を命じられ、掃除料を受け取っている。吉村は、山陵奉行所へは村用を優先して代人を遣し、「右御用不案内」とも述べ、これまで筆者が分析してきたような大和・河内・和泉の長・守戸とは温度差のある消極的な姿勢を示している。

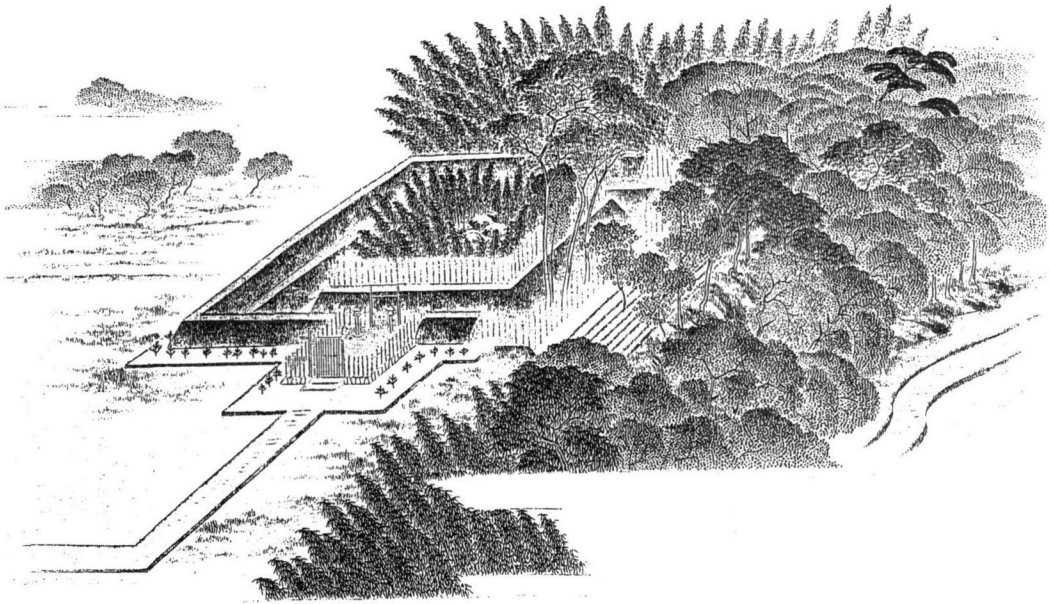
次いで、修陵後の慶応元年（一八六五）年五月、山城・丹波の諸陵に勅使が発遣され、崇光陵にも五月二日柳原光愛が参向する。次の史料は、勅使参向に際しての注意を触れた触である。

今般堀内村之内字泰長老 崇光帝 御陵江為 勅使柳原中納言殿明二日参向ニ付、道筋町々掃除いたし、手桶箒差出し、

荒蕪図



成功図



出典：『御陵画帖』（国立公文書館蔵）

若夜ニ[㊦]相候ハ、釣行燈差出し、町役人共夫々心ヲ付可申事

一道筋家々店先等へ罷出無作法無之様可致事、尤往来之者辻々
并通り筋へ罷出拜見無用之事

一道筋石塔・石仏類目障り不相成様、蔑簀ニ而も菰ニ而も懸ケ

置可申事

一通行之砌葬礼其外不浄之輩通り申間敷事

一牛馬往来致す間敷事

一火之元無油断入念可申事

一諸寺院等ニ而法事ハ勿論鉦打ならし候義無用ニ候、町家

ニおゐても右之趣可相心得事

右之趣支配中寺社在町々不洩様早々可相触者也

丑五月朔日 肥後

これを受けて吉村は、勅使の案内をする旨を伏見奉行所に届け出る。

上 乍恐御届口上書

一当村内字泰長老屋敷 崇光帝 御陵廻り并道筋共私江当分

掃除・見廻り等可致様、同御普請御掛り戸田大和守様御家

来^ル先達^ニ而^テ被^ル 仰付候二付、其段御伺奉申上、見廻り・

掃除為致罷在候、然ル処明二日右 御陵江為勅使柳原殿御

参向被遊候二付、入念掃除取斗、其節私義村役之廉ヲ以右

御場所之処道筋丈ケ御案内可致様、戸田様御家来神田辰

之助様^ニ被^ル 仰聞候二付、右御案内ニ罷出候様可仕奉存候

二付、乍恐此段御届奉申上候、以上

慶応元年丑年五月朔日

堀内村

庄屋勘兵衛

地方

御役人中様⁽³⁾

ここでも吉村は、陵墓管理を「当分掃除・見廻り」と述べ、勅使の案内も「村役之廉ヲ以」命じられたとしている。しかし、他の事例では、山陵奉行所が案内を命じたのは長・守戸等の陵墓管理者であった。このように、陵墓管理を「当分」のものと捉え、一貫して消極的な姿勢をみせた吉村と、山陵奉行所役人の認識は齟齬している。そうした吉村の姿勢が最も明瞭に示されたのが、慶応二年一二月の正式な長・守戸任命に関する次の史料である。

(前略) 戸田大和守殿^(伏見奉行所)当役所へ申来り候二ハ、其方共二御

陵長・守戸役被^ル 仰付候間、差支有無尋来り候二付、一統御

受申上候差支相尋間、差支有無可申上様被仰付候二付、則今

日ハ拙者義ハ得罷出不申、安左衛門相頼代人ノ儀二付、右之

趣御尋二付、如何可答哉申来り候間、右御尋ノ次第地方御役

所様へ伺見呉、何分庄屋役勤居候儀故、庄屋ニ差支候、而は如

何二付、如何可仕哉地方様^ニ御下知被下度相伺候処、是ハ御

受候而も別段庄屋役ニ差支候儀ハ無之、尤今日被仰付候訳ニ

而ハ無之、是迄内々ニ而も長役心得ヲ以テ相勤居候事故、只

今ニ至り断候訳ニテハ無之、御受可申様地方御掛り様方^(ママ)被

仰候間、御受可申ト寺社方様へ答ル、左候へハ一統御受申度
趣書付ニテ可申上様被仰付候（下略）⁽³⁴⁾

伏見奉行支配所

紀伊郡堀内村

勘兵衛

崇光院天皇

御陵御普請御成功ニ付、其方江長役申付候間大切ニ可奉守護
候、仍而苗字帶刀差許候、尤給米可被下之处、国事多端之折
柄ニ付、当分之間銀子被下之

寅十二月

（中略）

このため、吉村は寺社方へ「御受可申」と届けている。ここでは、
より明確に吉村が陵墓管理に消極的であることが分かる。吉村は、
多忙な庄屋役に差し支えることを懸念していたのである。

こうして、消極的ながらも長を引き受けることになった吉村は、
慶応二年一月二十九日他の守戸達とともに正式に任命されること
になった。左の史料は、任命時の様子が分かる貴重なものである。

十二月廿九日朝六ツ過一統京寺町丸太町上ル

大和守様御屋敷へ罷出候処、朝四ツ過頃二着、然ル所殿様御
所ニ御出勤ニテ、夜五ツ前迄待受候処、初夜前二御下り被遊、
直ニ夫々追々御呼出ニ相成、御白洲ト思敷所ニテ夫々御陵長
役ノ者凡三十斗一統ニ被仰渡、続而守戸役之モノ一統被仰渡、
右被仰渡候上、御玄関次御間ニテ御銀并御書下トモ御渡被成、
印形御取被成候

（中略）

右ニ付而ハ当所寺社方様へ左之通相伺差出し申候処、是者戸
田様⁽³⁵⁾当御役所江右之次第御達状無之候而ハ御聞届難成趣ニ
付、廿九日帰り届致シ置、右之次第内々地方津 様水 様江
咄合候処、御下ケ有之事故、書状無之而も不苦候得共、寺社
方ニ而右申立候ハ、其方トモ心得之様ニテ戸田様御家来様
江内々咄見候様被 仰付候ニ付、正月六日上京致シ、右之次
第咄合候処、小林仙三様・松井良吉様⁽³⁶⁾当御屋敷御用人様江
書状被下、持帰り（後略）

二九日に京都の寺町丸太町上ルの山陵奉行所へ出向いた吉村達は、
戸田が御所に行っているため待つことになった。実は、この時戸
田は、二五日に孝明天皇が死去したため、その対応に追われてい
たのである。⁽³⁶⁾戸田が帰館した後、長のみ呼び出しをうけ、山城国
の他の長達とともに白洲で正式な任命をうけた。続いて、守戸達

が同様に呼び出されて任命をうけ、玄関次間で俸給の銀と任命状を渡され、お受けの押印をしている。この時、長七枚・各守戸五枚・燈明料一枚の銀を受け取っている。崇光陵の守戸には、勘兵衛以外に、長格守戸吉村平兵衛（一六石一升一合七毛―持高、以下同）、守戸吉村三右衛門（六石四升四合七毛石）・村松治兵衛（一二石六斗三升）・吉川市左衛門（一〇石八斗八升七合三毛）・伏見京町二丁目樽屋石田九兵衛（二石八升九合）が任命されている。このうち、石田九兵衛の持高の中で八斗三升六合は、「御陵引地分」で、崇光陵が元々九兵衛所持地であったことが分かる⁽³⁷⁾。

その日伏見へ戻った後、伏見奉行所の寺社方へ、長・守戸に任命された旨を届けたところ、山陵奉行所から伏見奉行所へ宛てた達状が必要であるといわれる。地方役所へ内々に尋ねたところ、山陵奉行所の達書がなくても問題ないが、寺社方が必要というのであれば、山陵奉行所へ話してみようといわれ、正月六日に山陵奉行所役人の小林・松井から伏見奉行用人宛の書状を出してもらっている。こうして領主・奉行である伏見奉行への届出を済ませ、正式に長・守戸による管理が始められたのである。その後、吉村等は月に六回程度崇光陵の掃除を行って、明治七年（一八七四）一〇月の長・守戸の廃止まで管理を続けている⁽³⁸⁾。

最後に、大和・河内・和泉等の事例とも比較しつつ、吉村勘兵衛の事例から朝廷「権威」と在地社会の関係について言及しておきたい。

大和・河内・和泉では、陵墓の普請請負や守戸ポストを獲得しようとする個々人の利害に即した積極的な動きがみられた。その背景には朝廷が陵墓管理を通じて諸特権・役威の源泉になる状況があり、陵墓がその回路になったのである。

これに對して、山城、とりわけ京都周辺の場合、積極的に陵墓と結びつこうとしたのは、寺院やそれまでの長い由緒の確認を願った山科御陵村（この場合も村内家格の問題が背景にあった）のみであった。山城では陵墓が小規模であるため、そもそも請負を希望するほどの普請がなく、また、普段から朝廷と近接し、大和・和泉・河内と比べて公家や諸寺院と結びつく回路が多かったため、あえて守戸・館入関係を求めようという動きには繋がらなかったと考えられる。加えて、本章でみた吉村勘兵衛の事例は、大和・河内・和泉の事例とは極めて対照的なものであった。今のところ吉村家そのものの親類関係は不詳だが、文化期に吉村家から養子を出した深草村の公儀御草山守長谷川太兵衛家の親類書からは、多くの公家・武家家来と縁戚関係にあったことが分かる。また、吉村勘兵衛は代々伏見奉行所と密接な館入関係を持ち続けた。こうしたことを背景として、さらに、繁多な庄屋との兼務を懸念したため、陵墓管理に対して消極的な姿勢であったと考えられる。つまり、他の事例とは異なり、朝廷との繋がりにさほどメリットを感じていなかったと考えられるのである。

以上のように、全体として陵墓との結びつきを求める志向が希

薄な京都周辺の状況から考えるならば、大和・河内・和泉において大規模普請や勅使参向などの形で、陵墓が朝廷と結びつく回路としての意味を持ったことと、それをうけて中間層・村役人層が積極的な動向をみせた意味がより明確になるだろう。勿論、陵墓を通じて積極的に山陵奉行や朝廷と結びついた事例の場合であっても、結びついた側のそれぞれにそうした動きを生み出す背景が存在し、数ある「権威」の中から選り取られたとみななければならぬ。慶応期という最幕末段階においても朝廷、ひいては朝廷の「権威」といったものが絶対的なものではなかったといえよう。朝廷をはじめとした「権威」と在地社会との関わりについて、受給者の検討を十分行わないまま「権威の浮上」を指摘することには慎重でなければならない。「権威」とは選択されるものであることを強調しておきたい。

おわりに

以上、本稿においては、山城における陵墓管理の特質について検討を行った。

その結果、山城における公家・門跡家来や寺院が取締・長を務めるという特徴は、山陵御修補御用掛を務めた柳原・広橋・野宮等の公家への褒賞として、家来がそれぞれ長に任命されたことや、寺院境内に陵墓が所在するといった山城の特質によるものであつ

たことが明らかになった。山城では、諸寺院と公家・門跡等の家来が務める取締・長、及び陵墓周辺町村の役人層が務める守戸という、二つの異なった選任の背景を持つ人々によって管理が行われたのである。ただし、このような経緯であるため、おそらく実質的な管理は守戸達によって担われたと推測される。

次に、伏見の崇光陵をめぐる吉村勘兵衛の動き・認識は、大和・河内・和泉でみられた積極的な動向とは対照的な、極めて消極的なものであつた。これは、吉村が繁多な庄屋の役務への差障りを懸念したことに加えて、陵墓を通じた朝廷とのつながりを重視していなかったことを示し、「権威」として選択されていないということができよう。山城において、諸寺院や山科郷山陵村という、いわば陵墓との強い由緒を有する者からしか、陵墓管理者への任命を願う動きがみられない背景には、これと同様の傾向が存在したと考えられる。ここからは、村役人との兼務という、ある意味でデメリットを負ってまでも、長・守戸への任命などを願う大和・河内・和泉の状況の特異さも浮き彫りになるだろう。

また、京都周辺に限らず、大和・河内・和泉の場合でも、おそらく陵墓近隣にいながら、陵墓とのむすびつきを求めなかった人物は存在したであろう。ただし、そうしたつながりを求めなかった存在を実証することは極めて困難である。しかし、吉村勘兵衛の事例は、そうした見えにくい存在をも考慮しつつ、全体像の評価を行うよう促しているように思われる。これは、天皇・朝廷と

社会、あるいは「権威」と社会との関わりを評価する際に、史料上に現れる事例のみから性急に議論することには慎重であるべきで、全体の中での当該事例の相対的位置を常に考慮する必要を教えているといえるだろう。

- (1) 朝尾直弘「幕藩制と天皇」『將軍権力の創出』岩波書店、一九九四年、初出一九七五年、深谷克己『近世の国家・社会と天皇』(校倉書房、一九九二年)。
- (2) 宮地正人「朝幕関係からみた幕藩制国家の特質―明治維新政治史研究の一前提として―」『天皇制の政治史的研究』(校倉書房、一九八一年、初出一九七五年)。
- (3) 高埜利彦「江戸幕府の朝廷支配」『日本史研究』三一九、一九八九年、同『近世日本の国家権力と宗教』東京大学出版会、一九八九年。
- (4) 藤田覚「寛政期の朝廷と幕府」『歴史学研究』五九九、一九八九年、同『幕末の天皇』(講談社選書メチエ、一九九四年)、同『近世政治史と天皇』(吉川弘文館、一九九九年)。
- (5) 井上勝生「書評藤田覚著『近世政治史と天皇』」『日本史研究』四八八、二〇〇三年。
- (6) 西田かほる「近世後期における杜家の活動と言説―甲州国中・菅田天神社文書を素材として―」『史学雑誌』一〇六一九、一九九七年、梅田千尋「近世宮中行事と陰陽師大黒松大夫―朝廷周

辺社会の構造転換―」『日本史研究』四八一、二〇〇二年、靱矢嘉史「近世神主と幕府権威―寺社奉行所席次向上活動を例に―」『歴史学研究』八〇三、二〇〇五年、井上智勝「近世の神社と朝廷権威」(吉川弘文館、二〇〇七年)等。

- (7) 山城・丹波の事例を検討したものとして、享保期の桓武陵と丹波山国の光厳陵等を検討した鍛冶宏介「江戸時代中期の陵墓と社会―享保期陵墓政策の展開―」『日本史研究』五二二、二〇〇六年がある。また、拙稿「陵墓管理制度の形成と村・地域社会―幕末期を中心に―」『日本史研究』五二二、二〇〇六年でも安楽寿院家来や龍安寺の任命願を検討した。
- (8) (9) 注(7) 前掲拙稿、拙稿「幕末維新期の開化天皇陵の創出をめぐる動向―地域社会の受容を中心に―」『日本史研究』四七八、二〇〇二年、同「幕末維新期の陵墓と村・地域社会―飯豊天皇陵の祭祀・管理を事例に―」『歴史評論』六七三、二〇〇六年、同「幕末維新期畿内の権力と地域社会―山陵普請・管理を素材に―」『ヒストリア』二〇八、二〇〇八年。
- (10) 『御廣間雜記』(天理大学附属天理図書館吉田文庫 慶応元年二月八日条。
- (11) 『山陵御修補関係書類』(宮内庁書陵部図書課所蔵)。
- (12) 『御陵長守戸被下銀渡帳』(東京大学史料編纂所所蔵史談会採集史料)。
- (13) (慶応元々二年九)十月二十八日(大原重徳書状)『戸田家書類』

三、宮内庁書陵部図書課所蔵。

- (14) (元治元年) 子十一月「覚」(吉村勘兵衛家文書・京都市歴史資料館所蔵写真版)。

- (15) 『崇光天皇陵御取建一件諸記』(宮内庁書陵部図書課所蔵、以下「一件諸記」と略記) 慶応元年二月二十六日条。同史料からは、管理開始後も、吉村勘兵衛が伏見奉行支配に属する崇光陵の他、桓武・仁明・後深草火葬所の守戸達をとりまとめる立場にあった

- (16) 注(8) 前掲拙稿。

- (17) 注(7) 前掲拙稿。

- (18) 伏見奉行は、慶長五年(一六〇〇)伏見城代松平忠明が伏見町奉行を兼務したことに始まり、元禄九一一年の一時期廃止された。初期に二・四名が務めた他は、近世を通じて一名が任じられた。老中支配で、役料三〇〇〇俵、伏見町と周辺幕領を支配し、伏見・宇治・木津の船舶取締りを担った。与力一〇騎・同心五〇人が附属した。

- (19) (年月日不詳)「乍恐」(吉村勘兵衛家文書、京都市歴史資料館所蔵写真版)。

- (20) 吉村家文書は、現在京都市歴史資料館が所蔵している。本章で利用する史料は、文久期の崇光陵をめぐる動向をまとめた『崇光天皇陵御取建一件諸記』(宮内庁書陵部図書課所蔵)と京都市歴史資料館所蔵の同家文書写真版である。前者は吉村家文書中のものを写したもので、原本は京都市歴史資料館所蔵の近代の未整理

分に入っているとみられ、現在は閲覧できない。

- (21) 天保九年十月「乍恐口上書」(吉村勘兵衛家文書、京都市歴史資料館所蔵写真版)。同家文書中には同様の「乍恐口上書」が文政二年八月・安政六年九月のものなど数点残されている。

- (22) 文政二年十一月「乍恐口上書」(吉村勘兵衛家文書、京都市歴史資料館所蔵写真版)。

- (23) 元治元年八月一日「覚」(吉村勘兵衛家文書、京都市歴史資料館所蔵写真版)。

- (24) 天明八年五月六日「差上申一札之事」・文化十二年二月「乍恐口上書」(吉村勘兵衛家文書、京都市歴史資料館所蔵写真版)。

- (25) 文化十一年三月「書上」(吉村勘兵衛家文書、京都市歴史資料館所蔵写真版)。

- (26) 「一件諸記」慶応元年正月十日条。

- (27) 『京都御役所向大概覚書』上巻(清文堂史料叢書第5刊、清文堂、一九七三年) 四二頁。

- (28) 外池昇編『文久山陵図』(新人物往来社、二〇〇五年) 二二四、二二五頁の山田邦和氏の解説参照。

- (29) 「泰長老」は、この場所が伏見城下の西笑承兌(兌長老)の屋敷跡であったことに由来する。

- (30) 谷森善臣『山陵考』(『勤王文庫』第三編山陵紀集)。

- (31) 『山陵御修補之顛末』(宮内庁書陵部図書課所蔵)。

- (32) 「一件諸記」元治二年一月一〇日条。

(33) 「万留書」慶応元年五月朔日条(吉村勘兵衛家文書・京都市歴史資料館所蔵写真版)。

(34) 「一件諸記」慶応二年二月日欠条。

(35) 「一件諸記」慶応二年二月二十九日条。

(36) 武田秀章「孝明天皇大喪儀・山陵造営の一考察」(『維新期天皇祭祀の研究』大明堂、一九九七年、初出一九九二・一九九三年)。

(37) 「一件諸記」慶応三年三月二十九日条。

(38) 「一件諸記」明治七年一〇月一五日条。

(39) 吉村家から長谷川家へ相続のため養子が遣された文化期以降、吉村家が長谷川家の借財整理等、財政を差配している。幕末維新时期の長谷川太兵衛は仁明陵の長を務めている。

〔付記〕本稿は、研究大会での報告を元に原稿化したものである。研究大会で貴重なご意見を賜った皆様に感謝申し上げます。原稿化にあたっては、一章での山城における陵墓管理者の人的構成の特質について、大会後に検討した史料も加え、その特質を大幅に補足した。二章については、若干の史料と図版を補足した。

(大阪市史料調査会調査員)